

水田ビオトープ米で美味しいお酒を造るプロジェクト ～本業とWIN-WINの自然再生～

株式会社本家松浦酒造場 十代目蔵元 松浦 素子

1. はじめに

2019年11月11日、「とくしまコウノトリ基金(以下、基金)」のメンバーの方々が蔵にお越しくださいました。「ビオトープで育てた減農薬のお米で日本酒をつくってもらえないか?」というご相談だった。

2. コウノトリ飛来

兵庫県豊岡市で復活を遂げ、放鳥されたコウノトリが徳島に飛来し始めたのが2013年。酒蔵のある鳴門市大麻町(おおあさちょう)に、ペアが巣作りを始めたのが2015年。その巣は蔵の南西方向、直線距離で2キロの場所であった。そして、2017年3月、豊岡市周辺以外で全国初となる野生のヒナが誕生し、同年6月3羽が無事に巣立ちを迎えた。

その姿は通勤途中にもたびたび見かけるようになり、ヒナの成長ぶりをSNSで見守り、コウノトリを身近に感じるようにはなっていたが、自分達が関われるとは考えていなかった。

コウノトリラベルのお酒を造ろうか?とも考えたが便乗商法のように気が乗らず断念していた。



図1 大麻町の巣塔で育つヒナの様子
(写真提供、コウノトリ基金)

3. コウノトリに教えられた地元の自然環境

酒造りを検討する際、まず質問したのは、なぜコウノトリは絶滅したのか?なぜ大麻町に飛来したのか?という疑問であった。

基金の柴折さんのお話によると、コウノトリは米作りと共に生息していた鳥であったが、明治時代の乱獲で激減。戦後は水銀剤などの強毒の農薬の多用により、餌となっていた田んぼの水生動物がいなくなり、子育て時には1日1kgの食を必要とするヒナに十分な餌の確保もむずかしくなり、絶滅に至ったという。

大麻町には、旧吉野川の度重なる氾濫がもたらした

た肥沃な土地がひろがり、レンコン栽培が盛んである。レンコン畑に生息するオタマジャクシや、小魚、カエルなどコウノトリには格好の餌場になったのであろうと。

毎日眺めていた田舎の風景が輝いて感じられた。コウノトリが大麻町に残る大切な自然に気づかせてくれたのである。

酒蔵としては、グリーン社会に貢献できる貴重なチャンスを頂いたと考え、お引き受けした。基金の活動を少しでも多くの方に知って頂き、コウノトリが住めるエリアを拡大し、地球環境に優しい活動にもつなげ、残る自然を後生に繋いでいきたいと考えたからである。

4. ビオトープ米でお酒を造るプロジェクト

2020年夏、初めてビオトープでお米(ハナエチゼン)を収穫。田植えや収穫は基金メンバーのみなさんとご一緒し、色々な事を教えて頂きながら学び多い場となった。地元メディアも複数社かけつけ、日本酒ができる様子を幾度もみなさんに発信してくれた。



図2 大麻町の巣塔近くのビオトープ

5. お披露目会

お酒の名前は「鳴門鯛 コウノトリの酒 朝と夕」。今では日本でトップクラスの、ヒナを巣立たせているコウノトリペア「あさひ」と「ゆうひ」に敬意を表した。

販売価格は1本1500円(税別)。なるべくお米を削らず70%に精米した純米酒。自然の恵みを大切にしたいという思いである。使用した米の品種は、山田錦のような酒米といわれる米ではなく、食用米で造った純米酒。1300円が一般的な価格と考えたが、

お客様にも自然を守るお手伝いをする、という意識を持って頂くため、200円の寄附金を上乗せした。つまり、酒蔵がお客様から寄附金をお預かりし、お客様に代わって、酒蔵が基金に寄附をするという方法を採用した。



図3 令和3年発売した「鳴門鯛 コウノトリの酒 朝と夕」

お酒のお披露目会では、基金熊谷理事長に寄附金の贈呈を行った。1300本あまりのお酒は1ヶ月あまりで完売。報道により、広く告知され、多くの方に賛同いただいた。



図4 寄附金贈呈式の様子 基金理事長と筆者

6. サステナブルな社会の象徴へ

大麻町の「あさひ」と「ゆうひ」のペアは6年間、毎年ヒナを巣立たせている。そして、今は7年目のヒナ誕生のため、今年も、巣に巣材を運び入れる様子が確認されている。大麻町は、日本有数の、子沢山のコウノトリのペアが住む町となった。まさしく人と自然の共生、コウノトリが象徴となり、自然への意識が高まる活動が増えてきた。

基金の様々な活動は多くの人に自然だけでなく、農業、生物、原風景が残っていること、などの大切さを伝えている。

酒蔵としてどのように環境課題に取り組んでいくべきか、正直考えあぐねていたが、基金のような直接的に環境保護やSDGsの精神に則った取り組みをしている組織の活動をより広く知ってもらう活動なら、誰にでもできる。

7. 自然との共存で地方創生

コウノトリが運んでくれた良縁は更に広がる。酒蔵周辺は歴史文化スポットが集まっており、酒蔵の直売所にお越し頂く皆様に、ゆったりとした田舎の旅を楽しめる地域連携を目指している。

基金と様々な連携を行っている。搾ったお酒の酒粕をビオトープに投げ入れるイベント。水田に広がる水路をカヤックで進みながら、自然を体感するツアー。自転車であそびこん畑をめぐるコウノトリを探すポタリングツアーなど、コウノトリの支援と共に、活気ある町として未来に繋いでいきたい。



図5 自然を知るカヤックツアー



図6 れんこん畑を走るポタリングツアー

8. おわりに

コウノトリが教えてくれた地域に残る宝物に、地元企業のみなさんが気づいているかどうかはまだ疑問が残る。日々の活動で中小企業なりのグリーン社会への貢献を考え、行動し続けることが、これからの企業には必要条件であることは、間違いのない。経費過多では本来の事業が成り立たない。今回ご紹介したグリーン社会へのBtoB連携が良い事例になることを期待したい。